

分析報告書

-入学者選抜区分別の入学状況と高等学校訪問の効果-

要旨

2025 年度入試形態別データおよび高校訪問対象校からの入学者在籍高校データを分析した。入学者のうち総合型と学校推薦型選抜が全体の 75%を占め、居住地は東京都を中心とした 1 都 3 県に集中する傾向が見られた。また、高校訪問校の選定においては「継続」「追加」「調整」の 3 方向での検討が必要であることを明らかにした。

はじめに

本学の入学者確保においては、どのような入試形態で、どのような属性の受験生が入学しているかを把握するとともに、高校訪問に対して限られたリソースをどのように配分すべきかを見極めることが重要な課題となっている。しかし、これまで両者は個別に集計されることが多く、入試形態別データと高校訪問の実績データを突き合わせた分析は一部にとどまっていた。次年度以降の入試広報戦略および高校訪問校の選定方針の検討に資するための分析結果として、2025 年度入試形態別データ、および高校訪問対象校からの入学者在籍高校データの分析をまとめた。本報告書では、まず入学者全体の入試形態・出身高校・居住地等の属性を明らかにしたうえで（①入試形態別分析）、続いて高校訪問対象校からの入学実績を検証し、次年度以降の訪問校選定の方向性を示す（②高校訪問対象校分析）。

1 入試形態別分析

1.1 入試形態・出身高校の属性

入学者の入試形態を区分ごとに集計し、特別選抜（留学生）を除いた者を対象とした。入試形態の内訳は、総合型選抜が 44%、学校推薦型選抜が 31%、一般選抜が 20%、共通テスト利用（以下、共テ）が 5%となった。これを総合・推薦と一般・共テの 2 つに区分すると、総合・推薦計が 75%、一般・共テ計が 25%となった。総合型と学校推薦型からの入学者の合計が、一般選抜と共テ利用の合計の約 3 倍となる結果となった。なお、男女別の内訳をみると、男子学生が 72%、女子学生が 28%で、男子学生が女子学生よりも約 2.6 倍多かった。

まず、高校の設置区分（公立、市立、私立、その他）と入学者の出身課程（全日制、定時制、通信制、高卒認定、その他）と出身学科（普通科、商業科、情報系科、総合学科、その他）を集計した。設置区分では公立が 50%、市立が 1.5%、私立が 46%、その他が 2.3%と

なり、公立計（公立と市立の合算）52%と私立 46%を比較すると、公立計が私立をやや上回った。また、出身課程では全日制が 79%、通信制が 15%、定時制が 4%、高卒認定が 1%、その他が 0.4%の順となり、最も割合が高かったのは全日制であったが、次いで通信制の割合が 2 番目に高い結果となった。出身学科では、普通科が 73%、その他が 16%、総合学科が 6%、商業科が 4%、情報系科が 0.6%となり、普通科が最も割合が高かった。商業・情報・総合・その他を含めた専門課程等の合計は 27%となった。なお、出身学科を男女別の内訳で見ると、男子学生は普通科 73.7%、その他 16.5%、総合学科 4.9%、商業科 4.3%、情報系科 0.6%。女子学生は普通科 71.3%、その他 15.4%、総合学科 9.6%、商業科 2.9%、情報系科 0.7%となった。男女別で出身学科の割合を比較した結果、総合学科のみで女子学生（9.6%）が男子学生（4.9%）を 4.7 ポイント上回った。なお、普通科、商業科、情報系科、その他は男女ともにほぼ同じ割合であった。

1.2 居住地の分布

入学者（特別選抜の留学生を除く）の居住地を都道府県別に集計した。その結果、最も多かったのは東京都で 54.6%、次いで神奈川県 20.5%、埼玉県 7.9%、千葉県 3.7%、静岡県 1.7%、長野県と福島県が各 1.5%、新潟県 1.2%、沖縄県 1.0%、群馬県 0.8%、大阪府 0.6%、茨城県・岐阜県、熊本県・山形県・山梨県・鹿児島県・秋田県・北海道が各 0.4%、愛知・広島・山口・青森・大分・鳥取・栃木・福岡が各 0.2%となり、27 都道府県から入学があった。1 都 3 県で入学者の 87%となった。

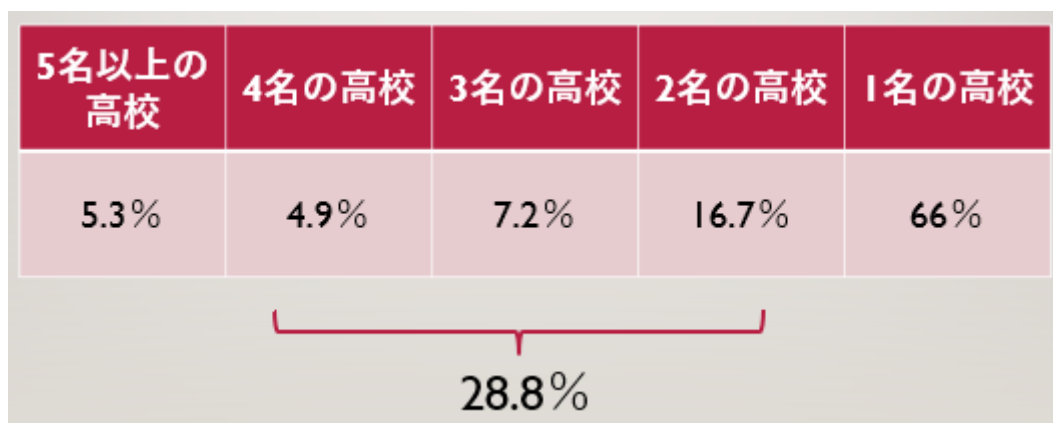
1.3 欠席日数・高校成績

入学者の高校時における欠席日数と高校成績を集計・比較した。欠席日数が 0 日は 12%、1 日以上 9 日以下は 39%、10 日以上 19 日以下は 15%、20 日以上は 24%、その他は 10%となった。その他は高卒認定者などが該当する。また、高校の成績は、A 区分（4.3 から 5.0 まで）が 10%、B 区分（3.5 から 4.2 まで）が 34%、C 区分（2.7 から 3.4 まで）が 45%、D 区分（2.6 以下）が 9%、高卒認が 2%となった。C 区分が最も多く、次いで B 区分、A 区分、D 区分、高卒認の順となった。なお、欠席日数と高校成績の相関関係を分析した結果、 $r=-.299$ ($p<.001$) となり、統計的に有意な負の相関が認められた。

1.4 出身高校の集計

入学者の出身高校を集計した。その結果、5 名以上の高校は全部で全体の 5.3%あり、A 校が 3.1%、B 校が 2.9%、C 校が 1.9%、D 校が 1.7%、E 校、F 校、G 校が各 1.5%、H 校、I 校、J 校が各 1.2%、K 校、L 校、M 校、N 校が各 1.0%となった。4 名の高校が全体の 4.9%、3 名の高校が 7.2%、2 名の高校が 16.7%、1 名の高校が 66.0%となった（図表 1）。

図表 1：入学者人数の割合（単位：高校）



1.5 入試区分別の内訳

入試区分を総合型、学校推薦型、一般選抜、共テ利用別に集計した。総合型選抜には44%の入学があったが、なかでも最も多かった型は2024年度に創設したスクーリング型＜合否発送日11/1＞で総合型全体の41.7%であった。次で、第4回目＜合否発送日2/7＞が14.2%、第1回目＜合否発送日11/1＞が13.3%、第3回目＜合否発送日12/25＞が11.8%、第2回目＜合否発送日12/2＞が10.9%、第6回目＜合否発送日3/8＞が4.7%、第5回目＜合否発送日2/25＞が1.9%、エリア試験場・静岡＜合否発送日12/2＞が0.9%、エリア試験場・福島＜合否発送日12/2＞が0.5%の順となった。また、学校推薦型選抜には31%の入学があったが、エリア試験場以外からの入学が92.7%、エリア試験場からの入学が7.3%となった。

次に、一般選抜と共テ利用を集計した。まず、一般選抜からは20%の入学があった。最も多かったのはベスト2教科＜合否発送日2/7＞で一般選抜全体の45.4%となった。次いで、英国数セレクト1教科型＜合否発送日3/8＞が22.7%、英語・国語（1期）＜合否発送日2/7＞が21.6%、英語・国語（2期）＜合否発送日2/7＞が5.2%、2024年度に増設した英語・国語（3期）＜合否発送日2/25＞が3.1%、2024年度に創設した小論文型＜合否発送日3/8＞が2.1%の順となった。なお、内3つの入試は1月に実施されたものであった（ベスト2教科の試験日は1/27、英語・国語1期の試験日は1/27、英語・国語2期の試験日は1/31）。また、共テ利用からは5%の入学があった。最も多かったのは、1期・2教科型で39.1%（共テ利用全体）、3期・2教科型で34.8%、1期・3教科型と2期・2教科型で各8.7%、2期・3教科型と3期・3教科型で各4.3%の順となった。共テ利用の内、2教科型からが82.6%、3教科型からは17.4%となり、教科数が少ない形を利用した入学者が多かった。

1.6 スプリング・サマースクールの参加状況

入学者が参加したスプリング・スクールとサマー・スクールについて集計した。まず、2024年3月に1日開催されたスプリング・スクールに参加した入学者は全体の1.7%、2024

年7月29日、30日、31日の3日間開催されたサマー・スクールに参加した入学者は32.0%となった（なお、スプリング・スクールに参加した学生は全員サマー・スクールにも参加している）。サマー・スクール参加者のうち、総合型選抜に出願したのは64.3%、内スクーリング型に出願したのは88.9%、総合型第1回目から第3回目までに出願したのは10.1%、エリア試験場に出願したのは1.0%となった。次いで、学校推薦型選抜に出願したのは35.7%、内指定校が80.0%、提携協力校が10.9%、公募第1回目が5.5%、エリア試験場が計3.6%となった。サマー・スクールは参加した授業の回数分、入試の書類点が加点されるという仕組みのため、入学者は自分の成績や欠席日数に応じて、各スクールへの参加回数を調整する傾向がある。その結果、入学者1人当たりの参加回数は平均3.2回となった。

また、スクールに参加した入学者の居住地を集計した。その結果、東京都からの参加が最も多く61.0%となった。このほか、神奈川県が18.8%、埼玉県が9.1%、千葉県が3.9%、沖縄県が1.9%、静岡県が1.3%、福島・長野・山梨・群馬・秋田・鹿児島からは各0.6%となった。一方、総合型選抜と学校推薦型選抜を利用した入学者の内、スクールに参加しなかった学生（全体の57.5%）の居住地も集計した結果、東京都が51.4%、神奈川県が22.6%、埼玉県が7.2%、千葉県が3.8%、福島県・静岡県が各2.4%、長野県が1.9%、新潟・群馬・岐阜・沖縄県が各1.0%、山梨・北海道・福岡・鳥取・大分・青森・山口・広島・熊本県が各0.5%となった。参加者と非参加者を比較すると、東北、中国、山陰、九州など関東より遠い地域ほど非参加となっていたことが明らかになった。

併せて、スクールに参加した入学者の出身高校を集計した。スクール参加者の出身高校は、総合型・学校推薦型選抜による入学者の出身高校全体の43%を占めた。このうち、高校訪問対象校が83.1%、高校訪問未対象校が16.9%となった。出身高校の内訳は幅広く分散しており、上位数校でおよそ15%を占める一方、過半数の高校は参加者1名にとどまっており、特定の高校への偏りは限定的であったと言える。

最後に、スプリング・スクールとサマー・スクールの両方に参加した学生（以下、Aグループ、全体の2.2%）、サマー・スクールのみに参加した学生（以下、Bグループ。但し、Aグループを除く、全体の40.3%）、総合型・学校推薦型選抜から入学したがスクールに参加していない学生（以下、Cグループ、全体の57.5%）の3グループを高校課程、高校成績、欠席日数で集計・比較した。その結果、Aグループは、高校課程（全日75.0%等）、高校成績平均は4.0、欠席平均は7.4日となった。Bグループは、高校課程（全日81.5%等）、高校成績平均は3.4、欠席平均は9.4日となった。Cグループは高校課程（全日81.2%等）、高校成績平均は3.5、欠席平均は17.7日となった。Aグループが最も成績が高く、そして最も欠席日数が低い結果となった。一方、BグループとCグループを比較すると、成績はCグループが0.1高く、欠席日数はBグループが8.3日間低い結果となった。

2 高校訪問対象校分析

2.1 高校訪問対象校からの入学状況

入学手続きを行った入試区分を集計すると、高校訪問対象校からの入学者について、総合型 45.6%、学校推薦型 34.1%、一般選抜型 17.4%、共通テスト利用 2.9%となった。これらの入学者の出身高校を単一化すると、高校訪問対象校の 25.9%の高校から入学があった結果となった。

2.2 A・B・C グループ分析

入学者の出身高校を、高校訪問対象校からの入学を A グループ（次年度の高校訪問校選定では継続訪問グループ）、高校訪問非対象校からの入学を B グループ（次年度の高校訪問校選定では訪問追加グループ）、高校訪問を行ったが入学に至らなかったものを C グループ（次年度の高校訪問校選定では訪問調整校グループ）とした。その結果、A グループは出身高校全体の 69.1%（入学者全体の 79.7%）が該当し、高校訪問対象校の 25.9%となった。1 校あたりの入学者は平均 2.1 名となった。また、B グループは出身高校全体の 30.9%（入学者全体の 20.3%）となり、1 校あたりの入学者は平均 1.2 名となった。最後に、C グループは高校訪問全体の 74.1%を占める結果となり、入学に至らなかった。

2.3 スクール参加者の出身高校分析（X・Y・Z グループ）

スプリング・スクールとサマー・スクールに参加した入学者の出身高校について、訪問対象校からの有無を整理した（なお、スプリング・スクール参加者はサマー・スクール参加者全体の 5.2%にあたり、全員がサマー・スクールにも参加している）。高校訪問対象校からの参加を Z グループ（次年度の高校訪問校選定では継続訪問グループ）、高校訪問非対象校からの参加を Y グループ（次年度の高校訪問校選定では訪問追加グループ）、高校訪問を行ったが参加がなかったものを X グループ（次年度の高校訪問校選定では訪問調整校グループ）とした。その結果、Z グループの訪問対象校から参加があった高校は、スクール参加者出身校全体の 75.7%（参加者全体の 83.1%）となり、高校訪問対象校の 11.1%となった。また、Y グループでは高校訪問非対象校からの参加が、スクール参加者出身校全体の 24.3%（参加者全体の 16.9%）となった。最後に、X グループでは高校訪問から参加に至らなかった高校が、高校訪問対象校全体の 88.9%を占める結果となった。

2.4 高校訪問対象校選定の方向性

A、B、C グループと X、Y、Z グループを比較すると、A グループの中に Z グループが 43.1%の割合で含まれていることが分かった。また、B グループの中に Y グループが 30.9%の割合で含まれている結果となった。以上のことから、今後の高校訪問対象校の選定の方向性を導くことができた。Z グループを含む A グループからの入学者は、1 校あたりの入学者が平均 2.1 名と高いため、高校訪問では継続して訪問を優先して行うべきグループである。また、Y グループを含む B グループは、1 校あたりの入学者が平均 1.2 名であるが、これまで訪問していなかったため、今後は御礼を兼ねた高校訪問が有効であると考ええる。最後に、

C グループと X グループである。これまで訪問してきたが、入学・参加に至らなかったグループであるため、高校訪問選定では調整が必要となる。

おわりに

本報告書では、まず①入試形態別データの分析から、本学の入学者が総合型・学校推薦型選抜を中心とし、居住地は東京都を中心とした 1 都 3 県に集中していることを示した。あわせて、出身高校や高校成績・欠席日数などの属性についても整理し、スプリング・サマー・スクールへの参加状況と入試区分・居住地・出身高校との関連を明らかにした。次に②高校訪問対象校の分析から、実際に入学実績のある高校（継続・追加グループ）と、これまで訪問してきたが入学や参加に至っていない高校（調整グループ）を、通常の入学実績とスクール参加実績の両面から区分できることを示した。